

Civil Engineer の Spirit



村尾 公一
論説委員
東京都・技監（建設局長兼務）

昨年土木技術者にとって忘れられない年であった。私自身は都という地方公共団体であるが国家の首都に存する、又地方自治制度としても日本で唯一県行政が市町村行政をも担っている立場で、現場の最前線での震災対応について多くを実感することができた。そこで感じることは、細分化された役割と、それを統合化して対応を行うことの困難さである。例えば、今般の震災で御遺体の火葬が間に合わず多くの混乱が生じた。都では、全国知事会の要請に応えいち早く火葬協力を申し出た。しかし、申し出だけで全てが上手く動き始めた訳ではない。本来葬儀場は市町村の仕事である。都の建設局が火葬協力を直接出来るのは、都道府県では都だけが東京市以来直営の葬儀場を持っているからだ。従って、直接自らの責任で受け入れ計画や実施の為の調整を主体的に行える訳である。一方火葬協力を呼びかけている側は火葬を担う市町村で、それを県が集約し全国知事会を通じて協力要請を行っている。当初、知事会や当該の県を通していたが、結果的に直接当該の市と調整を行った。実際に物事を動かす時、具体的な物の繋がりが想像出来ないことは致命的である。既存の仕組みが無い災害時には、殊に困難を極める。火葬協力では、地元警察の身元確認の検死、輸送手段の調達、輸送数と火葬数との調整、火葬後の仕組みづくり、御家族との御別れの方法等など。数え上げればきりが無い程の状況を想定し、一つ一つ具体的に詰めて行く必要がある。これらを全て詰めて、初めて具体的に動き出す。

このことは、土木技術者の世界を考える上で示唆に富む。多くの未知のプロジェクトは、現場に通じた知識と知恵に支えられ、大局を見る見識と果敢に決断する胆力に支えられる。土木工学の世界は細分化し、ややもすると全体像が見えない。懐古趣味では無いが、敢えて言えば、今の世に廣井勇や青山士を生み出すことが出来る素地が有るだろうか。はたまた内村鑑三の様な理解者を得ることが出来るのだろうか。調査を行い、計画を立て、設計を行い、積算をし、工事が発注受注され完成する。更に日々管理運営され、更新が計画され、長期に亘って使われていく。こうした社会資本の整備や管理を個別化して扱い、工学的な細分化や予算の流れによる役割

分担が成されている。この状況を超え学会が言う「民衆のために生きた土木技術者」をどの様に蘇らせることが出来るのかが、我々の世代に問われている。私は土木学会がその役割を担うとすれば、より熾烈な競争関係が展開される国際的な情勢を踏まえ、国家意識に根差した大きな志を持てる人材を大学教育のみならず、産官学の中で連携して生み出すことの大切さを認識し、技術者倫理の議論からその倫理観の背骨と成る、土木技術者として志を如何に持つべきなのか、また我々の先達ほどの様に志を持ち得たのかを学び教え伝えることが最も重要と考える。将に土木技術者魂である。

今、精神のデフレスパイラルに国中が陥っているのではないかと。経済学に長けている訳ではないが、日本国債の議論でも、国家経済と政府財政と家計簿の議論を意図的に混乱を喧伝する行為が罷り通っている。複式簿記で考えれば、円建ての負債に対応する資産が計上され、何らかの資産が同時に計上される。ましてや国家としてのB/Sは債権超過である。デフレ局面に於いて如何に国家経済を回復方向に導き、負のスパイラルから脱却させるかが真の目的であり戦略目標であるにも拘らず、戦術に過ぎぬ中央政府財政をあたかも最終目的のごとく錯誤した議論をすることで、精神のデフレスパイラルが助長されている。技術分野の中で土木の扱う範疇の広さを今こそ生かし、理学+経済学=工学の意識を強く持って社会に発信することが必要である。新しい時代、国土、都市、更に新しい国家像が変化の先にあるのではないかと。坂の上の雲を目指し坂を登った、その先に平坦な道が暫く続いた。ところが更に急な坂が待っていた。しかし急傾斜の坂であるが故に登るのも苦しいが、その先に見える雲はより高みに浮かぶ雲である。予測された人口減少も、萎縮した国土形成や経済も、縮んだ意識から生まれる。明治期を迎えた時、先人は予測に拘泥された現在を生きたのか。より豊かな国を一人一人が志を持って希求することで、現実が変化し未来が変わっていくと信じ、命の限り今という時間を生き切った筈だ。アウシュビッツ強制収容所のどんで、死と隣り合わせの時間を潜り抜けてきたユダヤ人精神科医のビクトル・フランクルは「夜と霧」の中で「一つの未来を、彼自身の未来を信じるができなかった人間は、収容所で滅亡していった。未来を失うと共に彼はそのよりどころを失い、内的に崩壊し、身体的にも心理的にも転落したのであった」（霜山徳爾訳、みすず書房、1961）。今我々は生き残りを掛けて如何に魂を取り戻し、何を為し得るかが問われている。